

「内なるインド」とイスラーム

榊 和良

1 はじめに

インドの宗教人口の13.4パーセントを占めるイスラームは、インド第2の宗教である。1億4000万人近いイスラーム教徒（ムスリム）を、地域的分布や都市部と農村部での比率に注目して見ると、地域的な偏りや農村部ではマイノリティでも都市部ではかなりの勢力をもつといった現実の姿が浮かび上がってくる。イスラーム教徒といっても、地域だけでなく出自や職業などによる多様なコミュニティに属しており、ひとくくりで定義づけることは困難である。

イスラームは、自らの文化保持のための努力と土着の文化との妥協をはかりつつ、対立と共存の中で発展してきた。インドにおいても、「インド人になる」ことや「インド人である」ことから、「外なる」あるいは「内なる」インドを投影した文化を形成してきた。その担い手は、イスラーム世界からの移住者やその子孫たち、さらにはイスラームに改宗したり同化した土着の人々であった。本報告では、前近代までのイスラームのもつ文化的語彙や象徴体系によるインドの宗教伝統の解釈を分析することで、伝統の自覚と宗教的混淆と称される内外の対立と融和に表出されるインド・イスラームの姿を考察する。

2 イメージの世界

「外なるインド」とは、イスラームがインドの地に本格的に足を踏み入れる前に、彼らがもっていたイメージの世界や、政権樹立後も対象化される姿であった。そのイメージは、インド人の社会や習俗に関する断片的ではあるがイスラームにとって奇異に感じられた情報に垣間見ることができる。東はマー・ワラーア・アンナフル（mā warā'a an-nahr）と呼ばれるトランスオクシアナ地方、西はアル・アンダルス、アル・マグリ

づまで拡大したイスラーム帝国に移入されたギリシアの地理学は、行政上必要な知識ばかりでなく、諸道と諸国の学と珍しいことや不思議なことを集めた国々の奇譚の学をももたらした。

イスラーム勃興当初から、数学、天文学や医学といったインドの実用科学は、アラビア語への翻訳や人的交流を通してかなりの精度で知られていたが、宗教伝統や哲学思想に関する情報は錯綜し断片的な情報が伝えられたにすぎなかった。商人スライマーンは、『シナ・インドの情報 (Akhbār aṣ-ṣīn wa al-Hind)』(851-852)に次のように伝える。「シナ人には学問はない。彼らの宗教の元はインドから伝来したものである。シナ人のために偶像を伝えたのはインドで、インド人こそ宗教の民であるとシナ人は信じている。この両国の人はともに魂の輪廻を認めるものの、彼らの宗教のこまかい点については考えを異にする」[スライマーン 1976: 30]。

諸道や諸国の書や奇譚の書の中でも、「イスラーム地理学の父」イブン・ホルダーズビヒ (Ibn Khurdādhbih d. ca. 885) の『諸道と諸国の書 (Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik)』(846, 885) やマスウーディー (Abu'l-Hasan 'Alī b. al-Ḥusain al-Mas'ūdī d. 956) の『黄金の牧場と宝石の鉱山 (Kitāb Murūdj adh-Dhahab wa Ma'ādin al-Djawhar)』では、インドの宗教セクト (milla) が、創造主 (神) や使徒 (rasūl) を信じるか否かなどにより 42 [Ibn Khurdādhbih 1967: 70] に分かれることなどを伝え、東方ペルシアやトランスオクシアナにおいて仏教徒らと交流のあった人々の情報からブーザーサフ (būdhāsaf < bodhisattva) として知られたブツダが、神の使徒であり「偶像崇拜者たちの改革者」であるなどにとらえた [Mas'ūdī 1970: ii, 45] が、詳細は百科全書家らによる分析を待つことになった。

イブン・アン＝ナディーム (Ibn an-Nadīm d. 995) の『目録の書 (Kitāb al-Fihrist)』(988) をはじめとして百科全書家たちは、体系的にインドの宗教伝統を描き出そうと努めた。ホラーサーン生まれの宗教史家シャフラスターニー (Abu'l-Faṭḥ Muḥammad ash-Shahrastānī d. 1153) は、『諸宗教と諸学派の書 (Kitāb Milal wa an-Niḥal)』(1127) に「インド人の考え方」をまとめた。インドという「巨大な宗教社会」には、預言者というものをまったく認めない者、運命論や二元論に傾倒した者、精霊 (rūḥāniyya) を受け入れる者、天体を崇拝する者、偶像崇拜者たちが

いて、信仰のしかたも偶像の性格においても異なっており、ギリシアにおけるような哲学者たちもいると伝える [Shahrestānī 1977: 599]。これらの情報源は、アッバース朝のカリフ、ハールーン・アッ=ラシードの時代に権勢を振ったバルマク家のヤフヤー・イブン・ハーリドがインドに派遣した使節のもたらした情報にたどられるとされる [Lawrence 1976: 26-28]。

中には奇想天外なものからかなりの精度をもつものまでが含まれていたが、インド人の祀る神々は、イスラームの神と人間の仲介をなす天使 (malak/pl. malā'ik) や預言者、精霊たちの主とみなされ、神から下された啓典をブラフマーが人間世界にもたらしたこと、終末が周期的に訪れることなどを、イスラームで信仰の対象となる天使、預言者、啓典、終末などの文化的語彙をもって解釈している。ブッダも「神の使徒であり神と被造物の仲介者」であると捉えられ、ブッダの説いた十善十悪も聖典クルアーンに説かれるイスラームの倫理規程と共通するものとして理解された。これらの中で特に驚嘆と困惑をもって伝えられたのは、インドの人々の浄不浄の観念、身分制度、化身思想、遍歴する出家遊行者たちとその超人的所業、火葬、寡婦殉死そして輪廻観などであった。

3 イメージからの脱却と翻訳

アル=ビールーニー (Abu'l Rayḥān al-Bīrūnī d. 1048) は、通称『インド誌 (Ta'rikh al-Hind)』(1030) の冒頭で、インド人とムスリムを隔てる壁を、言語の違い、信仰対象の違い、風俗習慣の違い、インド人の本性としての傲慢さやうぬぼれなどにあるととらえた [Sachau 1983: I, 17-24]。典型的なイスラーム知識人として、自らサンスクリット語の科学文献だけでなく宗教・哲学文献をも翻訳したように、言語の違いはイスラームの伝統である翻訳文化によって克服する努力がなされた。初期の翻訳活動を支えたのは、アラブ世界や中央アジアから仕官を求めてやってきた伝統的イスラームの教育を受けたエリートたちであった。

ムガル皇帝アクバルは「翻訳局」を設立し、実用科学だけではなく宗教、法学、文学など幅広いジャンルにわたる翻訳を活発に行なわせ、宮廷や地方の貴族たちも、近代インド諸語による民衆文学にも翻訳活動や庇護の手を伸ばした。『マハーバーラタ』は、イスラーム世界で伝統的に尊ばれた鑑文学 (教訓文学) とみなされ、『戦記 (Razm Nāmah)』の

名でもペルシア語訳された。その前書きで、宰相アブル=ファズル (Abu'l Faḍl d. 1602) は、異なる宗教に属する人々の間の相互理解の促進や対立と反目を乗り越えて神への道を共に歩もうというアクバルの動機を謳っている。その一方で、訳文中には、神的威厳と威光を備えた君主として臣民を服従させ、その姿を通して神を崇拜させるという君主論に宗族を超えた共通性があることをインド人にもアピールしようという政治的意図も垣間見られる [榊 2001: 39-44]。

アル=ビールニーは、イスラームでは一般に異端視される輪廻が「インド人の信仰のしるし」であると看破したが、この世での行為の結果として来世で獲得されるイスラームの一部にある靈魂の転生 (tanāsukh al-arwāh) の考え方を示す術語 (naskh, maskh, raskh, faskh) を用いて、『サーンキヤ・カーリカー』や『ヨーガ・スートラ』の注釈書に示される輪廻論を説明した [榊 2008: 786]。同じ術語を用いて、イル・ハン国の皇帝ガーザーンに仕えたラシード・アッディーン (Rashīd ad-Dīn d. 1318) は、『集史 (Jāmi' at-Tawārīkh)』の中で、バクシー (bakhshī) と呼ばれた仏教徒たちの六道輪廻観を詳解した [Jahn 1980: 83-92]。一方、キリスト教やシア派の一部にみられる神性や神的部分が宗教的指導者に宿るという受肉・降臨 (ḥulūl) という観念も同様に異端視されたが、ヴィシュヌの化身 (アヴァターラ) の訳語として用いられるようになった [榊 2004: 23]。

異端視される考え方を翻訳したり解説するムスリムは、微妙な立場に立たされた。ラーマを「神の降下」とであると認める『ラーマヤナ』を「不吉な書」と捉え、『マハーバーラタ』を「たわけた作り話」と批判する翻訳家バダーオーニー ('Abd al-Qādir Badā'ūnī d. ca. 1615) は、偏見なく字義どおりに翻訳することをアクバルに命ぜられたために「異端を語った」ことを神に懺悔している [Badā'ūnī 1972: ii, 366]。皇帝シャー・ジャハーンの長子ダーラー・シュコー (Dārā Shukoh d. 1659) は、イスラームの枠組みで理解したインド人の神観念、宇宙論、宗教実践法を『二つの海の交わるころ (Majma' al-Baḥrayn)』に術語集成の形で個人的論考と断ってまとめたが、それこそが異端の嫌疑をかけられる原因ともなった。公的政治的意図によるものであれ、個人的精神的意図によるものであれ、相互理解のための翻訳には「外なる」イメージの壁があった。

4 共有された象徴体系と「内なるインド」

インドがペルシア文学の中心地となった16世紀から18世紀に、数多くのペルシア語辞書が編まれ、ペルシア語はインドの文化語としての地位を確立した。14世紀半ばから17世紀にかけて多くのサンスクリット語で書かれたペルシア語教則本や語彙集も編まれて、翻訳文化は、外來のムスリム・エリートやその子孫たちにとってかわって、為政者の言語を学んだヒンドゥーのムンシー（書記）やカーヤスタ（書記階級）らの手に委ねられることになった。そこには「内なるインド」が反映されることになる。その一方で、アラビア語の神学書や預言者伝などのペルシア語訳やウルドゥー語をはじめとするインド近代諸語によるその要約だけではなく、これらの影響を受けた土着の民衆文学がイスラームの教理や象徴体系を伝える役割を果たすことにもなった。

「ムハンマドは神の使徒なり」というイスラームの信仰告白の言葉の「使徒」をアヴァターラと刻んだ貨幣が鑄造されたように、イスラーム世界で共有された預言者のもつ象徴的イメージは、土着の聖者や英雄にまで拡大されることにより、土着の民衆文化に根ざした日々の生活や口承文芸に載せて民衆により身近なものとして受け入れられることになった。ダキニー・ウルドゥー語で歌われたデカンの村の女たちの石臼ひきの歌、糸紡ぎ歌、子守唄や婚礼の歌 [Eaton 2000]、ベンガルのショット・ピール (satyapīr) の伝承 [Stewart 2000]、タミル・ムスリムの叙事詩 [Narayanan 2000]、グジャラート・スインドゥ・パンジャブに広まったイスマーイール派ニザーリーのホージャたちが伝える宗教詩やロマンス叙事詩 [Mallison 1998, 2010] などでも、預言者ムハンマドやその一族、スーフィー導師らが、プラーナ的アヴァターラ論に組み込まれ、土着の聖者や指導者たちの姿となって神への道の仲介者として救済や解脱をもたらすとみなされた。

翻訳文化の担い手はペンの人々のみではなかった。スーフィーの導師や行者たちは、ヒンドゥーの行者との直接的交流からヴェーダ以来の伝統である祭式や儀礼をその宇宙観とともに世俗的な形で取り入れ、さまざまな身体技法を学び、自らの宗教・哲学体系の枠組みの中で自らの言語や土着語で翻案を生み出した。『ゴーラクシャ・シャタカ』のペルシア語訳は、ジャパと称名 (dhikr)、アーサナと座法 (jalsa)、ディヤーナと

観想 (taṣawwur)、思念の集中 (tawakkul) などを対応させて違和感なく受け入れた。『甘露の水瓶 (Amṛtakunḍa)』と題されるナータ派ヨーガの修道論・呪術的祈祷・占術などの集成のアラビア語訳、ペルシア語訳やその重訳では、ナータ派の導師たちはイスラームの使徒や聖者と同置され、女神に捧げるマントラは守護天使への祈祷文に変えられ、種字の布置はイスラーム以前からの伝統を受け継いだアラビア文字の神秘学 (ḥurūf) で解釈された [榊 2000、2005、Ernst 2003]。

象徴体系の転換は、スーフィーの修行階梯において獲得される心の深化の階梯であり神の顕現の過程でもある現象界 (nāsūt)、不可視界 (malakūt)、叡智界 (jabarūt)、超越界 (lāhūt) という術語の適用にも見ることができる。ベンガルのスーフィー、サイイド・ムルタダー (Sayyid Murtaḍā) による『甘露の水瓶』の翻案である『ダルヴィーシュのヨーガ (Yoga Qalandar)』などでは、クンダリーニ・ヨーガにおけるチャクラに、クトゥバン (Kutuban) のロマンス叙事詩『ムリガーヴァティー (Mrigāvatī)』(1504) やアブドゥル＝ワヒド・ビルグラミー (Mīr ‘Abd al-Wāḥid Bilgrāmī) によるブラジュ・バーシャーのマトゥラー方言で歌われるヴィシシュ派バクタの語彙集『インド人の真理 (Ḥaqā’iq al-Hindī)』(1566) では、巡礼地を象徴するものと解釈される。イスラームのもつ象徴世界は、土着語の文学を通してインドの精神世界における象徴体系に共有されていった。

だが、注意しなければならないのは、「内なるインド」を秘めた土着のムスリムにも、「外なるインド」を背負うムスリムやその子孫たちが告白したような葛藤があったことである。ベンガルにおいては、いかなる言語も神が授けてくれた言語であるとしてベンガル語で作品を表す決意を示す一方で、ペルシア・アラビア文字を用いて表す作品が多く見られたように、侮蔑や異端視に対する恐れと不安があったのである。

5 分離と統一の超克

インド・イスラームとは誰なのか、アイデンティティーを求める声が挙げられるのは、体制を維持するための政治的理念としての統一原理を要求する力が働くときである。インド・ムスリムを構成する主体は、帰属すべき世界を複合的にもちつつもイスラームを信奉する人びとである。その中には、預言者時代にさかのぼる理念としてのイスラームの理

想を追求し実践することで正統イスラームを自認する人々もいれば、既存の土着文化の要素を取りこんだ社会の中で正当化されたイスラームを生きる人々もいる。異なる文化間の対話には、「自分自身のまなざしがひきおこす歪曲」すなわち「自分自身がどういうメガネをかけているのか、つまり、どういうフィルター、どういう思考の枠組み、どういう先入観を通して眺めているのかを、自覚しなければならない〔ロジェ＝ポール・ドロワ 2002: ii〕と指摘されるように、インド・イスラームがもつ多様性の諸要素を理解することにより、ムスリム社会内部の対立や外部との摩擦を超克するための対話の糸口が見出せるのではない。

参考文献

- Al-Badā'ūnī, 'Abd al-Qādir, 1982, *Muntakhab al-Tawārīkh*, Aḥmad 'Alī and Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), Osnabrück: Biblio Verlag, 3 vols. (Original edn., Calcutta, 1864-1869).
- Eaton, Richard M., 2000, "Sufi Folk Literature and the Expansion of Indian Islam", in *Essays on Islam and Indian History*, New Delhi: Oxford University Press, pp. 189-199.
- Ibn Khurdādhbih, 1967, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, De Goeje, M. J., (ed.), Bibliotheca Geographorum Arabicorum, Leiden: E. J. Brill, (1st edn., 1889).
- Jahn, Karl, 1980, *Die Indiangeschichte des Rasīd ad-Dīn*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Lawrence, Bruce B., 1976, *Shahastānī on the Indian Religions*, The Hague: Mouton.
- Mallison, Françoise, 1992, "Muslim devotional literature in Gujarati: Islam and bhakti", in R. S. McGregor (ed.), *Devotional Literature in South Asia - Current Research 1985-1988*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 89-100.
- Mallison, Françoise and Tazim R. Kassam, (eds.), 2010, *Ginans Text and Contexts, Essays in Ismaili Hymns from South Asia*, Delhi: Ratna Sagar.
- Mas'ūdī, 1970, *Les prairies d'or*, Texte et traduction par C. Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, tome I- IX, Tehran: Maṭbū'at-i Ismā'īlīyān (1st edn., Paris, 1861-77).
- Narayanan, Vasudha, 2000, "Religious Vocabulary and Regional Identity: A Study of the Tamil *Cirappuranam*", in David Gilmartin and Bruce B. Lawrence (eds.), *Beyond Turk and Hindu: Rethinking Religious Identities in Islamicate South Asia*, Gainesville: University Press of Florida, pp. 74-97.
- Sachau, Edward, 1983, *Al-Bīrūnī's India, an Account of the Religion, Philosophy, Literature, Geography, Chronology, Astronomy, Customs, Laws and Astrology of India about A. D. 1030*, Delhi: Munshiram Manoharlal, (1st edn., London, 1910).
- Shahastānī, 1977, *Kitāb al-Mīlāl wa an-Niḥāl*, ed. 'Abd al-Laṭīf Muḥammad al-'Abd, al-Qāhira: Maktaba al-Andjūlū al-Miṣrīya.
- Stewart, Tony K., 2000, "Alternate Structures of Authority: Satya Pīr on the Frontiers of Bengal", in *Beyond Turk and Hindu*, pp. 21-54.

榊和良、2000、「『甘露の水瓶 (Amṛtakunḍa)』とスーフィー修道法」、『東洋文化研究所紀要』、139、239-273 頁。

榊和良、2001、「『マハーバーラタ』ペルシア語訳とアブル・ファズルの君主論」、『印度哲学仏教学研究』、16、34-48 頁。

榊和良、2004、「アヴァターラ論考—異教世界との対立と共存—預言者性をめぐって」、『仏教学研究』、47、17-37 頁。

Sakaki Kazuyo, 2005, 'Yogico-Tantric Traditions in the *Ḥawḍ al-Ḥayāt*', *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 17, pp. 135-156.

榊和良、2008、「アル・ゼールニーの見たインド人の輪廻観」、『印度学仏教学研究』、56-2、782-787 頁。

スライマーン、藤本勝次 (訳注)、1976、『シナ・インド物語』、関西大学出版・広報部。

ロジェ＝ポール・ドロワ、島田裕巳・田桐正彦 (訳)、2002、『虚無の信仰—西欧はなぜ仏教を怖れたか—』、トランスビュー。

さかき かずよ ●北海道武蔵女子短期大学